

chapter

2

被害対策に役立つ 中型獣類の生態と行動特性



被害対策に役立つ中型獣類の生態と行動特性

2-1 アライグマ

【分布】

北米原産のアライグマ科の動物で外来生物法（環境省:2005）による特定外来生物に指定され、日本では1960年代に野外での生息、1977年には繁殖が確認されている。日本に広く拡大した原因は性質が荒いことを知らずに愛玩用として多くの個体が輸入され放獣されたことである。現在では秋田、高知、沖縄以外の44都道府県に生息している（図2-1）。



写真2-1-1 黒いアイマスクと白いヒゲ

【生息環境、形態的特性、基本生態】

識別点は目の周辺を覆う黒い部分（アイマスク）と白いヒゲ（写真2-1-1）、縞々の尾（写真2-1-2）である。尾の縞は5～7本で本数、パターンは個体により少しずつ異なる。

雑食性のため農作物だけではなく在来生物の食害（写真2-1-3、動画1、2）など自然環境に与える被害も大きい。

また、休息や子育ては神社・仏閣（動画5）、人家など建物の屋根裏や壁の隙間などで行うので爪痕や糞尿、破壊行為なども問題となっている。活動は夜間が中心だが昼間も活動する。繁殖期は春季で、4月中旬が出産のピークとなる。産仔数は1～7頭で野外活動を始めるのが6月上旬。子別れは遅く秋遅くまで母親と行動を共にする。

【被害の概要、特徴】

アライグマの被害が拡大する背景には在来動物とは異なる行動特性と生活様式がある。木登りを得意とする行動（写真2-1-5、動画8）がそのひとつ。原産国では休息や繁殖場所として高木の樹洞（動画3、4）などが利用されていることもあり、優れた能力として備わっている。登る技術は種によって異なるがアライグマは手のように使える前肢を巧み（動画6）に使うことで上下の移動を容易（写真2-1-7）にしている。通常、爪は補完的に使うのでささくれた大きな痕跡は残らないが、滑りやすい場所や後肢を一気に引き上げたい場合などは爪に依存する（写真2-1-6）。様々な果樹や家屋侵入被害が拡大している原因はこの能力によることが大きい。



写真2-1-2 明瞭な縞が特徴的な尾

前肢を手のように使った特徴的な痕跡は農作物被害現場にも残される。ぶどうなどの袋掛けする作物は裂いたように破れ（写真2-1-8）前肢で触れた跡が汚れとなって残る。すいかは直径5～6cmの穴を開け（写真2-1-9、2-1-10、動画7）前肢を使ってくりぬくように中身だけを食べる。このような食べ方ができるのは前肢を手のように使えるアライグマだけである。

アライグマの痕跡は汚れ、爪痕だけではない。エサを取る時、とくに樹上ではかなり乱暴な動きをするので枝折れ（写真2-1-11、2-1-12）が発生する。枝折れは長期間ダメージが残るので大きな問題である。



写真2-1-3 ナガレタゴガエル成体被害



写真2-1-4 アカガエル成体被害

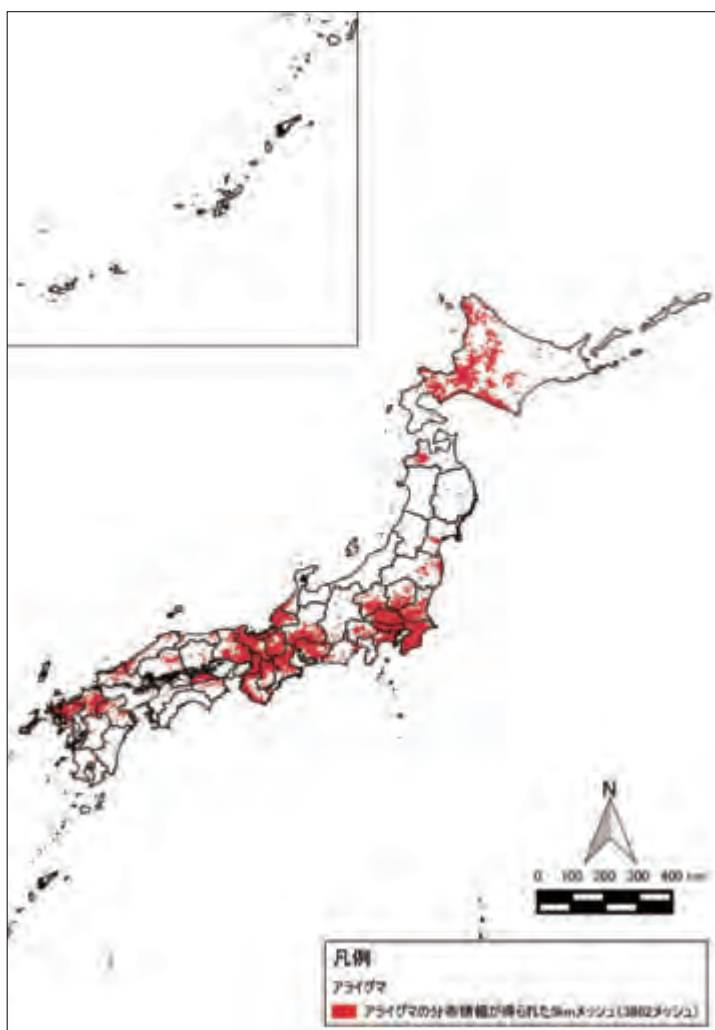


図2-1 アライグマの分布図(環境省)



写真2-1-5 樹上のアライグマ



写真2-1-6 滑りやすいときは爪を使う

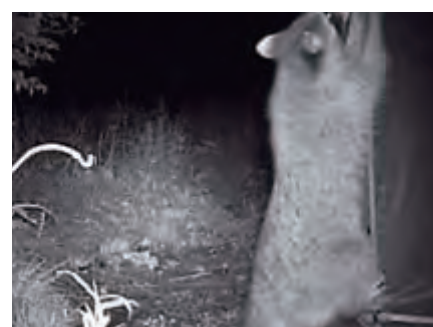


写真2-1-7 前肢を高い位置に置いて体を引き上げる



写真2-1-8 前肢で汚されたぶどう被害



写真2-1-9 前肢でくりぬかれたすいか被害



写真2-1-10 すいかを食害するアライグマ



写真2-1-11 ブルーベリーの枝折れ被害



写真2-1-12 サクラランボの枝折れ被害

アライグマの1年

4月はアライグマの出産時期である。出産は建物の壁の隙間や木の樹洞などで行われる。母親は出産後一カ月ほどで巣穴を移動する。子供はまだ自力では動けないので母親がぐわえて行方。移動先は餌場の近くで、6月上旬から野外活動を始めようになってもエサに困らない。野外活動を始めた子供は常に母親と行動を共にしてエサの探し方や危険回避などを教わる。成長が早く夏を順調に過ごした子供たちは母親の2/3程度の重さになる。

10月、アライグマに親離れの季節がやってくる。この時期、十分に成長した子供たちは母親の大きさとほとんど変わらなくなっている。ここまで成長していれば親と離れても厳しい自然を生き抜くことができるだろう。若くして親離れする動物よりもある程度成長するまで親離れしない生活様式の方が一年後の生存率も高くなる。親と行動を共にする独特の生活様式がアライグマの増加につながっているのである。親離れした子供たちはどこに行くのだろうか。親と共に過ごした行動エリアに残ることはできない。知らない場所への旅が始まるのである。この時、親と別れた子供たちにはオスとメスで明確な行動の違いがみられる。オスは過ごしたエリアから遠く離れた地域へ移動していく。危険を伴う壮大な旅である。でも、この行動が血縁関係による障害を回避し生息域の拡大にも繋がっているのである。一方、メスは過ごしたエリアのすぐ隣に新しい生活エリアをつくる。こちらは旅と呼ぶには少し大げさかもしれない。隣町への小さな冒険といったところである。アライグマは明確なテリトリー（ナワバリ）はないが個体ごとにある程度決まった行動域は持っている。遠い場所に旅するオス、隣へ冒険するメス、新たな場所での新たな生活が始まるのは事実である。アライグマはこうやって生息域を拡大しているのである。

親離れした子供たちに最初に襲い掛かる厳しい試練が冬である。冬は初めての経験である。寒さと乏しい食べ物の中ひとりで生きて行かなければならない。そして、たくさんの試練を乗り越えて成獣として春を迎えるのである。成長が早かったメスはひょっとすると4月には母親になっているかもしれない。こうしてまた一年が始まる。



動画1_採食1
(ヤマアカガエル)



動画2_採食2
(ヤマアカガエル)



動画3_樹洞



動画4_樹洞を利用



動画5_神社侵入



動画6_前肢使い
(カギ)



動画7_前肢使い(スイカ)



動画8_木登り